

○ 今月のみことば

N.M

「**ヱス**は、**ヘレ**王の時代に**ユダヤ**の**ベツレヘム**でお生まれになった。その時、占星術の学者たちが東の方から**エルサレム**に来て、言った。「**ユダヤ**人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。私達は東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」(マタイ2章1～2節)

救い主**ヱス**様がお生まれになった時に、夜空に大きく光り輝く星を見つけた博士達が、救い主に会おうために、星に導かれて**ヱス**様のところに着くまでに一体何日かかったのでしょうか？約2000年以上過ぎ去った今では、誰にも分かりませんが、きっと長く、苦しい旅だったのではないのでしょうか。

都会の夜は明かりが付くため、星はあまり美しく光りませんが、田舎では夜は暗く、冷たく冴えた空気の中で星がキラキラと宝石のように美しく輝きます。星は夜が暗ければ暗いほど美しく輝いて見えます。東方から来た博士たちは、星を頼りに**ヱス**様を探し求めて旅を続けたのですから、きっと夜に旅をしたのではないかしら？そして、昼間も星が見えた方向に向かって歩み続け、夜に再びはっきりと方向を見定めていたのではないかしら？と思いました。そんなことを考えていた時、ふと、人生の夜にも当てはまるのではないかなと思いました。人生は子供も大人も、いつも晴れた日(楽しく、嬉しく、何もかも上手くいく日、絶好調の日)ばかりではありません。暗い夜に相当する日々(何もかも上手くいかない日、悩み苦しむ日)もあります。晴れた日に相当する日々に、人は自分一人で歩き、あえて救い(主)を探すことはあまりないかも知れません。しかし、人生には暗い夜に相当する時もやって来ます。その暗闇の中にこそ、大きく光り輝く星(人生を導く星=**ヱス**様)が今までよりもずっとはっきり見えるのではないのでしょうか。明るい光に照らされている時は見えなかった星が、暗闇の中で輝きを放つのです。人生に希望と勇気を与えてくれる光を見つけるのです。そして昼間に相当する日々にも、その光の方向へ向かって歩み続けて行くのです。こう考えていくと辛く苦しい日々も恵みの時かもしれないと思えてきました。

夜空に大きく光り輝く「星」をみた博士たちは、どんな苦勞をしてでも救い主**ヱス**様を探し求め続け、とうとう見つけたのです。途中であきらめなくて良かったですね！

私達も、どのような日々であれ、光である**ヱス**様を探し求め続け、出会い、共に歩んで下さる**ヱス**様について行けますようにと祈ります！！

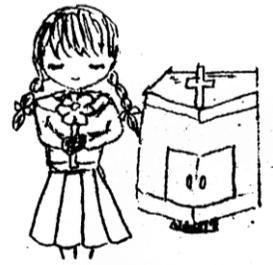
生徒の心に語り掛けたいこと

時間は偉大な先生

Z.N

“ひと世代経つ校庭の野菊かな、(信)

11 月中頃から御聖堂横の植え込みに白い花が咲いており、「秋明菊」かな、と気になって先日近づいて確かめましたら、小さな野菊でした。あ、この辺りは私が勤め始めたころは小さな池があり、菖蒲のころは水辺に綺麗に咲いていたなあ、ふと思い出しました。



ところで、昨年中学・高校の同窓会で「(人柄が)まるくなりましたね」と何度か言われました。社会の不正義や不平等への反感を一身に背負ったように振る舞い、とんがった印象を人に与えていたようで、反省させられました。私に「まるくなったね」と言ってくれた人にもまたその後いろいろな苦労や悩みがあり、何とかそれを乗り越えてやってきたという人生模様があったことでしょう。それがなんとなくわかる年になりました。時間がかかりました。

数年前から杜甫の「贈衛八処士」という詩を座右の銘にしています。山田洋次監督の「男はつらいよ」のあるシリーズで、寅次郎が中学時代の恩師を尋ねるシーンで、その恩師が酔いにまかせてこの詩を高吟し、「寅は何十年たっても成長しておらん」と叱りとばすのですが、それを見て、山田監督もこの詩が好きなのだなあ、と思いました。

「人生相ひ見ざること 動もすれば参^{まゐ}と商のごとし」で始まる長い詩です。内容は杜甫が二十年ぶりで再会した友人とその家族のもてなしを受けて、深い感慨にふける、というものです。そのなかで、「若いときは長くないね。お互いに白髪もふえた。今、旧友を訪ねると半分はもうあの世。そう思うと腹の底から熱いものがこみあげてくる。君と二十年ぶりに会おうとは思ってもみなかった。独身だった君に、もうこんな何人も子どもができて、お父さんの友達だといって私を歓迎してくれている」というくだりがあります。

還暦を過ぎると、こういう詩句に滋味を感じ、しみじみ胸に应えます。若いときには「ふーん」で通り過ぎてしまったかもしれません。まことに時間は偉大な「先生」なのだなと、最近つくづく思っています。

(2018.12.6)